

2012年5月発行 27号 すどう美術館
〒250-0853 神奈川県小田原市堀之内 373
TEL.0465-36-0740 FAX.0465-36-0739
info@sudoh-art.com
http://www.sudoh-art.com

あーとは地球を救えるか

村上 敬

私が本格的にアートに興味を持ってからまだ5年ほどでしょうか。

きっかけとなったのは、現在のライフワークの一部である『山野草』との出逢いだと思っています。それまでの私は全くと言っていいほど興味を持っていませんでしたが、偶然プレゼントされた一鉢の山野草を機会に、終わりのない奥の深い世界へと、のめり込んで行ったのでした。それからのスピードはとてつもなく早く、そして制御不能なほどに日々変わっていく自分が恐ろしくもあり、嬉しくもありました。

そんな折でした、以前からお名前を聞いていた『すどう美術館』を訪ねたのです。先ず感じたのは圧倒的に開放的である事、それに加えて展示空間が大変変化に富んだところでした。しかも常にレベルの高い作家、若手有望な作家達の作品が展示されています。すどうさんの考え方を聞きしたり、作品たちを何度か拝見しているうちに、遂にハマってしまいました。

そして昨年の震災が起きたのです。私ができた事と言えば、僅かの義捐金を送らせていただいた事や、浜岡原発の停止署名活動をお手伝いしたことぐらい

でした。

昨年、私はある意味アートに狂っていました。兎に角興味を持った場所なら、あらゆるところに足を運び、参加し、見学し、当然のこと購入もしました。そしてこちらも今までに経験した事のないほどのスピードと行動量で1年という時間を駆け抜けていきました。

新しい年を迎えた今年、少し落ち着き昨年とまったく逆の動き、行動パターンに気が付いたので、本業の方に集中していたのです。自分でもなぜなのか理由は分かりませんが、生活の糧となるモノの方に気持ちと時間を優先しています。

私は本業である家づくりもアートだと思っていますし、鉢の中で造り出される山野草の自然な姿もアートそのものだと確信しています。その二つのキーワードに携わらせていただけましたものとして何ができるのか、まさに今、模索しているところでもあります。

『あーとは地球を救えるか』という壮大なテーマは日々の小さな積み重ねでしか超える事のできない何かがあるのだと感じています。その大きな壁はきっと苦しく、楽しい道のりの先にあるのだと思います。

点描

こんな話でよかったら (14)

仙仁司

そう思いませんか

近頃、ギャラリー廻りが楽しくなってきた。特に女性アーティストの作品に見るべきものが多い。見終わった後々まで心に残っているのは、ほとんど女性の仕事。無用に他人の眼に煩わされることも少なく、自らの感性を育て上げ身辺を隈無く観察して、鋭い感性に切り取られたままの明確なメッセージに話し掛けられ時を忘れてしまう。先日2人の女性作家の日本画とイラストレーションに感じ入るものがあった。男眼には見落してしまいそうな風景を描き切っていて、帰り際に「ありがとうございます。」と言って先に頭を下げたのは勿論私の方だった。

ようやくこのような女性作家が多く見られるようになったのは女性自身の意識が高揚しているからに違いない、元々、男性中心であった美術界では指導者の多くは男性で、その眼が一方向的に女性にも向けられて男性界に引きずられてしまう傾向があった。女子学生の珍しかった美術大学も、現在では、大学によっては70%に近く、男性専科であった彫刻科でさえ女性専科に変わってしまいモチーフもテーマも素材も多様化、女眼の鋭さが大きな変化をなしとげてしまった。

女性の存在感は強まり、男性中心の時代とはまるで異なり、女性の感性が生活の隅々まで入り込み、これまで一方通行気味であった美術界もようやく男女交流の時を迎えようとしている。

男の眼を通すもの、女の眼を通すもの。同じものを見ていても異なるものを見ている不思議。

山田町と大植町にすどう美術館がやってきた!



人など二十人を超す人たちの参加があり、大植の町も山田の町も、まだまだ復興には時間がかかりそうですが、被災者の方たちも

すどう美術館が事務局となって立ち上げた「東日本げんきアートプロジェクト」が、標記のタイトルで四月二十七日(金)から五月四日(金)まで、岩手県の大植町と山田町に行ってきました。昨年の大震災で大きな被害のあった二つの町の皆さんに、元氣や心の安らぎを届けたいとの思いで、「未来へ。げんきアート」展と「人間賛歌。菅創吉」展の二つの展覧会、バイオリンとギター、コンサートそして、美術や音楽のワークショップなどを行なってきたのです。私も「絵は心のこぼれ」というテーマでギャラリーアートをしました。現地へは「未来へ。げんきアート」に出展した十五人、コンサートの二人に加えボランティアの人

不安定な気持ちが続いている状況ですが、それぞれの町の皆さんが、美術や音楽にたいへん歓迎してくれました。絵を見て涙を流す人、コンサートを聞きながら涙を拭く人など多く、心の傷の深さを感じさせられるのですが、このイベントを通して少しなりとも気を紛らわすことができ、役に立ったのではないかと感じられ、うれしく、また、ホッとしています。出展した作家たちや演奏家の熱意が現地の皆さんに届いたのだと思います。宿泊場所は長崎のカリタス教会が大植に唯一形だけ残ったビジネスホテルを改装し、九州を中心とするボランティアのための施設でした。神父さんが、私たちのプロジェクトの内容をよく理解し、宿泊を認めてくれたのですが、合宿のような生活の中で、そこで一緒に住んだ他のボランティアの人たちとの付き合いもとても楽しく有意義でした。今回はチャリティ展やチャリティコンサートによる協力の支えにより、資金を集めることができ、実現できましたが、できるだけ継続していければと思っ

白いノート 7

その先に仕事が始まると思いつき言葉がある。数年前初めて海外出張がせまり緊張でいっぱいになる時、ある方から「それを楽しまくらないの余裕というか、度胸がないとね」と言われた。その言葉にふつと気が楽になり、不思議と不安よりも楽しみな気持ちの方が大きくなっていった。アートは人を笑顔にし、新しい出会いと交流を生み、人の気持ちを動かす予想を超える力があることを経験してきた。この時も、初めて行く土地で、アートを通じてどれだけ未知数のものに出会えるか、何よりそれを楽しみに思えたのであった。忙しい仕事の日常にあると、限られた時間の中でいかにそれをこなすか、つい目先のことにとらわれ勝ちになるが、その先にやってくる醍醐味を思えばどんなことでも楽しくなる。仕事ができる人ほど、忙しいはずなのに「モアを忘れず、気持ちに余裕がある」と感じるのは、いつもその先にあるものをきちんと見据えているからである。アートの新たな可能性に向かって、これからも日々臨んでいきたい。

高橋玉恵



展覧会 info

海辺の寓話 — 加藤肇司・2012

6月2日(土)～17日(日)
11:00～19:00 (最終日～17:00) 月曜休館

作家のことは
3.11以後、より深く「存在の危うさ」ということを意識するようになった。今回、特に意図してそうなったというのではないが、すべての作品が「在ること無きこと」の寓話的な表現になってしまった。(これは、どうということなのだろうか。)
自分にとって、あらたな方法による紙の仕事を展開します。加藤肇司

名まえのない絵：きだまりの10人展

野口佳代子 羽田利江 小野博子
尾崎道子 俵芳恵 糟谷友子 三浦晔
菊地幸子 西塔真知子 片岡良子
6月2日(土)～17日(日)
11:00～19:00 (最終日～17:00)

月曜休館

人知れず野に咲く花を「名も無い草」という言い方があるが、絵にもそういう風情のものがある。絵は、人と出会い発見されて名まえをつけられる。そのとき、はじめて絵は「絵」となるのである。遊画会で一緒に絵を学んでいる10人の作品展です。見る喜びに充ちた展覧会であることを願っています。加藤肇司

菅創吉展

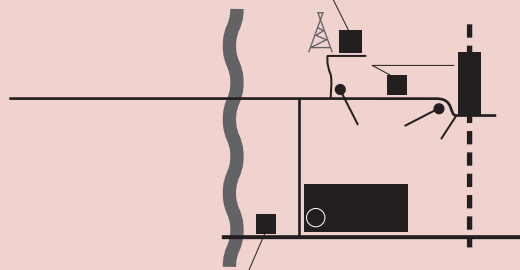
2012年6月19日(火)～7月1日(日)

11:00～19:00 (最終日～17:00)

月曜休館

多くの皆さまからご要望をいただき、すどう美術館のコレクションの中心となる菅創吉(1905-1982)の作品を久しぶりに展示いたします。ユーモアと人間味に溢れ、「私は人間が好きなんです」と言っていた菅創吉の全貌をあらためてご覧いただければと思います。

すどう美術館



AQUA



AQUA